EMERALD DRAGON

プロローグ

●プロローグ

太陽はゆっくりと水平線の彼方へ去り、小島は闇の中へ溶けていった。古びた石造りの家の中に、1つの大きな影と2つの小さな影が、風になびく蠟燭によって壁に映し出されている。

大きな影の所有者、この島で最長老の白龍である。老いたその顔のしわは深く、翼は張りをなくし、くぼんだ目は光を失っていた。小さな影の1つは老白龍とは対照的な青き幼龍。8年前に生まれたアトルシャンである。のこり1つの影、この島、いやこの世界でたった1人の人間の少女、タムリンであった。

四方を時空の障壁に囲まれたこの世界にもともと存在していたのは海と小島（彼らはドラゴン小国と呼ぶ）と数種の小動物のみであった。そこへ1500年前、かの地より高等魔術によって、龍達が次々と移って来たのであった。

いつものように物語を語り終えた老白龍は、少女から自分がここへ来た時の事を話してくれとねだられた。少し上を向いた老白龍は、わずかの時間沈黙すると、ゆっくりと話を始めた。

「おまえがこの地に来たのは3年前の夏のことじゃった。嵐のすぎた次の朝、浜辺に打ち上げられた難破船の事を知ったときは、さすがのわしも驚いた。

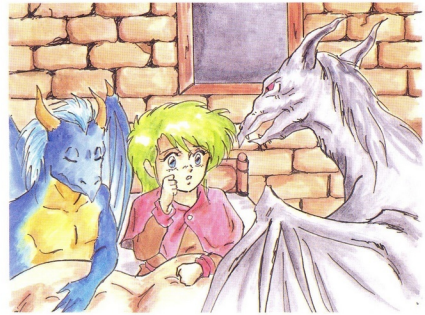
じゃが、わしのように老いさらばえた者にはすぐ分かった筈じゃ。あの懐かしい、広大無辺に広がる肥沃な大地の……わしらの故郷の匂いを……

その船がなぜ異世界のこの島に辿り着いたのか。わしには今でも分からん。おまえはその船のたった一人の生存者じゃったのじゃ。船室の中でも少し高くなっておる、そしてもっとも安全な場所に、荷物に守られて倒れていたそうじゃ。

知っておるじゃろうが、わしらは子供に恵まれん。ほれ、お前の隣でもう寝むってしまっとるアトルシャンも100年ぶりの子供じゃった。じゃからわしらは、おまえも同じ様に大切に育てようと思ったのじゃ。」

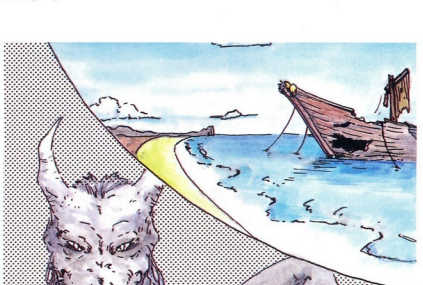
ここまで話して、老白龍は何かを考えるように沈黙してしまった。彼の心をめぐっているのは……そう、彼の故郷、四季の美しき変容は多世界随一と言われ、天からの温かく柔らかい恵の光は、そのまま天界にもっとも近い聖地だと言われた。花が咲き、妖精舞う永えのユートピア……。

イシュ・バーン。



老白龍が長い回想から現実に戻った時、２人の子供は寄り添って寝息をついていた。老白龍は表情を柔らげると、２人に毛布をかけてやったのだった。
「タムリンよ、おまえが１人で生きてゆけるようになった時、わしは苦しい決断をしなければならないかもしれん。おまえの生まれた世界、イシュ・バーンは、それはそれは幸せな世界じゃ。」
老白龍の顔にわずかな除りがさす。
「今は人間が霊長となって、賑やかにやっておることじゃろう。おまえにとっても、そこで暮らすのが１番の幸せなんじゃろうからのう。」

1500年前、イシュ・バーンをある恐ろしい呪いが襲った。龍族のみにかけられたその呪いは、彼らの息をつまらせ、血を枯らし骨をきしませた。そしておびただしい数の龍が死んでいった。生き残った僅かの龍達が隣接するこの異世界に移り住んだのだった。しかし、彼らはあの呪いが序章である事を知らない。



このの ち９年後、タムリンはつらい別れを経て、故郷であるイシュ・バーンへ戻っていった。アトルシャンから贈られた彼の片角をしっかり握りしめて。
幼き頃暮らしていたイシュバーンとはいえ、全く覚えていないこの世界。それでも彼女は龍達の言う聖地で、人間としての幸せをたとえ小さくともつかもうと思っていた。しかしその思いは、最初に目を開いた瞬間に消し飛んだ。
「……これが……聖地イシュバーンなの……？」
タムリンの足元には、数え切れない兵士の死体と、さらに多くの得体の知ぬ生物の死体で埋め尽くされていたのだ。
15年前突然現れた魔軍と、イシュバーン唯一の王国エルバードとの戦いは、しだいにエルバード軍の劣勢となりつつあった。平和な世界で育ったタムリンには自分がどうしたら良いのか分からず、逃げ惑う人々をただ見やるだけであった。

「おい、聞いたか？　ドゥルグワント要塞が危ないらしいぞ」
「バカな！　今日まで魔軍を押さえ続けてきたエルバード最大の砦だぞ」
「強力なモンスターだけで編成された別動隊が、動いているらしい。たしか、オス……なんとかって言う……」
隣で聞いていた別の兵士が口を開く。
「オストラコンだよ。あの人間の恥さらしめ。奴が別動隊を指揮しているのさ。」
その時、片腕に矢を受けたままの兵士が飛び込んで来た。
「ドゥルグワント要塞が陥ちたぞ！」大声で叫ぶ。「現在魔軍はふたてに別れて、アーバスの砦を攻撃……中。そして……」
矢を受けた片腕を押さえたまま、崩れ落ちそうになった彼を、他の兵士が慌てて抱きとめる。
「そして、もう一方は……ここミスラ・ミフルへ進行中……」
兵士達の顔に緊張が走った。

タムリンがイシュ・バーンに帰ってから、３年の月日が流れた。
ウルワンの町で長老から小さな家を借りて生活をする彼女は、まだ戦火の及ばぬこの町に送り込まれて来る傷ついた兵士達の看病に、忙しい日々を送っていた。この日タムリンは、初めてこの世界を見た時以来の衝撃的な光景を目の当たりにする事になる。　それは、キルデールから運ばれて来る十数人の負傷した子供達、という話だった。しかし半数はすでに惨たらしく死んでおり、生きている子供達も治療すらできないほどの火傷や深い傷に、医者は首を横に振った。呆然と立ち尽くすタムリンの手を何かが触れる。
「……お姉ちゃん……たすけ……て……」
思わずその場から飛び出してしまうタムリン。止めどもない溢れる涙を押さえる片手。あの人の、いつも彼女の心の支えになっていた角笛を握り締める、もう片手。いま、彼女の中でできる限りの力を振り絞り魔軍に対決を挑む決意が、燃え上がる炎のごとく立ち上がる。涙を止め空を仰ぎみれば、決意をした彼女をあざけり笑うように魔物の虚像が浮かんでいる。
「見てらっしゃい。私一人ではあなた達にとてもかないやしないわ。でも私には、あなた達なんか足元にも及ばないほど強い味方がいるのよ。」

タムリンは祈りの丘へ来ていた。神の世界を始めとするあまたの世界へ通じる道に、もっとも近い場所と言われる祈りの丘である。
「ここならきっと届く筈だわ……！」
今、万感の思いを込めて、タムリンは角笛を吹き鳴らす。

主人公のアトルシャン

ナゾの美少女タムリン

剣士バルソム

魔導士バギン

王子ハスラム

女修導士ファルナ

レジスタンスのホスロウ

弓使いのヤマン

闘士カルシュワル

吟遊詩人サオシュヤント

ミスティーナ

サギー

メリル

エルバード王

フシュルヌム

武器屋

防具屋

道具屋

宿　屋

カジノ

闘技場

オストラコン

ガルシア

名医ワラムル